



超訳【維摩経】サンプル版

作者：**bunchin-do**

概要：初期大乘仏教典の傑作であり、かの聖徳太子も注釈本を書き下ろしたという「維摩経」の超訳チャレンジ。「宗教書」などと考えず、純粹に「読み物」として楽しんでいただければ、これ幸い。

第1話 維摩居士、登場

昔々、インドのヴァイシャーリーという大都市に、維摩詰（ヴィマラキールティ、以下「維摩」）という長者がいました。

彼は熱心な仏教徒でしたが出家はせず、お城のような巨大なお屋敷で、妻子や使用人たちと暮らしていました。

維摩は溢れんばかりの才能と情熱、そして資産を持っていました。

そして、とても幸いなことに、それら全てを人助けのために使うと固く心に決めていたのです。

実際、彼の活動は融通無碍であり、大きな成果を上げていました。

貧しい人には施しを与え、悪人は教え諭し、怠け者にはハッパをかけるなど、全ての人に対して、それぞれのレベルに合った導き方をする彼の人間性は、まさに天下に轟いていたのです。

ある日、維摩はこう考えました。

「これまでは自分であちこち飛び回り、色んな人たちを導いてきたわけだが、もう長いこと続けてきたのでちょっとマンネリ気味だなあ。

そうだ！ここはひとつ、私が「病気で寝込んだ」という噂を流してみよう。

そうすればきっと、私のことを心配して、人々は自分たちの方から私のところに集まってくるに違いない。

うん、なんて効率的なアイデアだろう！」

さて、維摩が「病気で寝込んだらしい」という噂が広まると、国王や大臣をはじめ、資産家やその家族たちなど、あらゆる階層の人々が、数え切れないほど彼の家に集まってきました。

こうして彼らを待ち構えていた維摩は、病気をネタにした説教を実施し、大成功をおさめることができたのです。

作戦成功の余韻にひたりながら、維摩はふと思いました。

「私はこうやって「病気で寝ている」ことによって、たくさんの人たちに仏の教えを説くことができた。

そういえば当の仏様は、こんな私を見舞いにきてくれないものだろうか？」

第2話 シャーリプトラ

ちょうどその頃、維摩の住むヴァイシャリーの町に来ていた世尊（お釈迦様）は、町外れのマンゴー樹園で、500人の弟子と修行僧8000人、それから32000人の菩薩を相手に説教の真っ最中でした。

維摩の思考をテレパシーで察知した世尊は、一番弟子のシャーリプトラ（舍利佛）に言いました。

「おい、維摩のオッサンが見舞いに来て欲しがっているぞ。
シャーリプトラよ、お前さん、ちょっくら行ってきてくれないか？」

表情を曇らせるシャーリプトラ。

「いや、そうしたいのはヤマヤマなのですが、私、どうもあのオッサンが苦手なんですよ・・・

実は以前、林の中で瞑想にふけている時に、維摩のオッサンに因縁をつけられたことがありますてね。

あのオヤジ、座っている私のところにやってきて、いきなりこう言ったんですよ。

「何をこんなところで引き籠っとるんじゃ、いい若いモンが！！

修行は、ただ座り込んでおればよいというものではないぞ。

あれやこれやと忙しく社会生活をこなし、かつ、心の安定を失わないようにすること、それを修行というんじゃ！

わかったか、ボケ！！」

・・・で、私、言われっぱなしで一言も反論できなかつたんです。

ホントすみません、あのオッサンだけは勘弁してください・・・」

第3話 モッガラーナ

一番弟子のシャーリプトラに断られた世尊は、二番弟子のモッガラーナ（目連）に言いました。

「じゃあ、モッガラーナ、お前が維摩の見舞いにいってきなさい。」

血相を変えて言い訳を始めるモッガラーナ。

「え？私ですか？！

いや、そのなんと申しますか、維摩とはちょっと色々ありまして・・・

以前、私がこのヴァイシャーリーの街角で、たくさんのお金持ちを集めて説法をしていた時のことなんですが、ヤツがいきなりやってきて難クセをつけ始めたんですよ。

「あー、ダメじゃダメじゃ！そんなやり方では全然ダメじゃ！！

「説法」というからには、お前さんは「法」を説こうとしているのだと思うが、そもそも「法」とは何じゃ？

「法」は生き物ではない。生死とは離れているからじゃ。

「法」は人格主体を持たない。過去未来と断絶しているからじゃ。

「法」は文字ではない。言語を超えたものだからじゃ。

「法」はかたちがなく、虚空のようなものじゃ。

「法」は「空」であるが故に議論の対象ともならないのじゃ。

「法」は美醜といった概念を離れ、増えることも減ることもないのじゃ。

「法」は生じることも滅することもなく、帰っていくところもないのじゃ。

「法」は一切の分別を超えたものなのじゃ。

どうじゃな？そんな「法」をお前さんはいったいどうやって「説く」つもりなんじゃ？

「法」とは説いたり説かれたりするものではなく、示されたり得たりするものでもないのじゃぞ！

「法を説く」とは、いうなれば幻術士が自分で作り出した幻の人に対して説得を試みるようなものじゃ。

そこのところをよく理解して「説法」するのでなければ、まったくダメじゃ！」

とかなんとか、凄惨な剣幕でまくし立てられてしまいました・・・

で、私が集めた金持ちの聴衆は、すっかり維摩の弁舌に聞き惚れてしまったりして、もう私のメンツは丸つぶれでした。

申し訳ありません。誰か私でない他の人に頼んでください。」

第4話 マハーカッサパ

二番弟子のモッガラナ（目連）にも断られた世尊は、教団最年長でリーダー格でもあるマハーカッサパ（摩訶迦葉）に言いました。

「じゃあ、マハーカッサパ、お前が維摩の見舞いにいってやっておくれ。」

マハーカッサパは、沈痛な面持ちで答えました。

「ああ、世尊よ、まことに申し訳ありませんが、お役に立てません。あれはかなり前のことなのですが、私がある貧しい村で托鉢乞食修行をしていた時のことです。

出し抜けに維摩さんが現れ、こう言ったのです。

「おいおいカッサパさんよ。お前さんともあろう人格者が、いったい何を血迷っているんじゃない？

あんたは元々大富豪の家に生まれたのに、それをなげうって出家したのじゃろう？

なのに今度は貧乏人からせびり取ろうというのかい？

そいつは大きな心得違いってやつじゃ！

そもそも「托鉢乞食の行」は何のためじゃ？

ひとつには「食飲」を克服するため。

また「何ものをも受け取らない」という教えの実践のため。

そして「一切のものに施す」修行のためじゃろう？

よく聞きなさい。世の中の全てのものは「実体」を持たない。

いまさら生じないのと同様に、もはや滅びることもないのじゃ。

人がものを食べるのは、煩惱があるからでもなければ、煩惱を離れたからでもない。

俗世間に留まるのではなく、また涅槃に入るのでもない。

このことがよく理解できたなら、施したからといって特別にハッピーなことがあるわけでもなく、役に立つわけでもなく、かといって損をするわけでもない、ということがわかるはずじゃ。

そのぐらいの心がけを持って、托鉢乞食の行を続けなされ！！」

と。

私はそれを聞いて、心の底から感動し、世の中にはなんと素晴らしい人物がいるものだ、と思い知ったのです。

それからというもの、私は「ただ一方的に教えを聞くだけ」とか「誰の言うことにも耳を貸さない」とかいった極端な修行法を一切捨て、人にも勧めないことにしています。

そういった経緯があるので、私にはその役目を務める資格がないと思うのです。」

第5話 スプーティ

教団最年長でリーダー格でもあるマハーカッサパ（摩訶迦葉）にも断られた世尊は、般若心経で説かれているいわゆる「空」の理論を最も良く理解していると評判の秀才スプーティ（須菩提）に言いました。

「しょうがないなあ。じゃ、スプーティ、お前に頼もう。」

スプーティは、苦渋に満ちた表情で答えました。

「うーん、維摩ですか・・・

実は私、彼の家に托鉢に行ったことがあるんですよ。

維摩は私のさしだしたドンブリにご飯を特盛りしてくれました。

そこまではよかったのですが、さあ食べようとしますと、彼がこんなことを言い始めたのです。

「お若いの、まあ聞きなさい。

食べ物を食べるという点だけとってみれば、全ての人間は等しいといえるじゃろう？

食べ物について等しいのだから、その他いろいろな事柄についてもやはり等しいのじゃよ。

煩惱を絶つことができなくても、迷いを滅ぼすことができなくても、そのままの状態で解脱することが可能だということがわかるかな？

良いことがあるのでもないのでもなく、凡人でもなく聖人でもなく、真理を見るのでも見ないのでないということをもよく理解して、食事をするようにしなさい。

もしあなたがブッダと出会わなかったとして、あの6人の外道の師匠に従っていたとするなら、彼らが堕ちてゆくところへ共に堕ち、そこで食事をするべきなのじゃ。

もしも悪魔と手を組んで、法をバカにして一切の人たちと敵対するような人物になりきれたなら、そこで食事をしてよいということになるのじゃ。」

・・・私はこれを聞いた時、あまりの意味不明さにゾッとして、なんだか気味が悪くなったので、ドンブリには手をつけないで立ち上がるとそのまま逃げ帰ろうとしたのです。

すると維摩は言いました。

「これこれ、お前さんいったい何をビビッとるんじゃ！

例えば幻術によって作り出された幻の人が今のセリフを言ったのだとしたら、それでもお前さんはそのようにビビるかね？」

私は「いや、そんなことはないかも・・・」と答えました。

維摩はさらに言いました。

「じゃろ？全てのことは幻みみたいなものなんじゃよ。

そしてそれはつまり、「解脱とはこの世の中の現象全てのことにほかならない」という意味なんじゃ。」

維摩がこの言葉を語ると、周囲にいた200人のこどもたちが、全て悟りを得てしまいました。

「そんな人をいったいどうやって見舞ったらよいというのですか・・・」

第6話 プールナ

「解空第一」の秀才スプーティ（須菩提）に断られた世尊は、弁舌が爽やかなことに定評のあるプールナ（富楼那尊者）に言いました。

「まったく、どいつもこいつも・・・プールナ！お前はどうか？」

プールナは、爽やかに答えました。

「結論から申し上げますと、私には無理ですね。
何故ならば以前、こんなことがあったからです。
ある日私が、大きな樹の下で、新入生たちを相手に仏教の初歩的な講義をしていた時のこと
です。

維摩さんがつかつかとやってきて、こう言ったのです。

「はいはい、ダメダメ！そんなんじゃまるでダメじゃ！

お前さんがやっていることは、高価な食器にカスのような食べ物を盛り付けるようなもんじゃ
。

よく聞きなさい。

大通りを直進しようとしている者に、横道や脇道を教えてはダメじゃ。

牛の足跡に海の水を全部入れようとしてもダメじゃ。

折角まだまっさらな初心者の心に、わざわざキズをつけるようなマネをするんじゃない！

この者たちは元々立派な誓いをたてていたのじゃが、今、まさにそれを忘れそうになっている
のじゃ！」

維摩さんはそう言うと、目を閉じて瞑想を始めました。

すると何としたことでしょう！

500人以上いた新入生たちは、突如として皆それぞれの初心を思い出し、修行への誓いを新
たにすると、彼の足元に平伏したではありませんか！

私はその時、人にものを教えるにあたって一番大切なのは「相手の能力・素質」をしっかりと
見抜くことだということを、つくづく思い知らされたのです。

・・・というわけで、私には荷が重過ぎると思うのです。」

第7話 カッチャーナ

「説法第一」の名演説者プールナ（富楼那尊者）に断られた世尊は、どんなに難解な教義でも一発で理解してしまう大秀才カッチャーナ（迦旃延尊者）に言いました。

「カッチャーナ！お前なら行ってくれるよな？」

カッチャーナは、静かにかぶりを振ると言いました。

「申しわけありません。それは私にも無理です・・・
昔あなたが短期講座で仏教のポイントをかいつまんで話されたことがあったでしょう？
あの時私は、初心者にも理解しやすいようにと思って、それぞれのポイントについて逐語解説をやったんですよ。

「これこれは「無常」についての説明である」

「これこれは「苦」についての説明である」

といった感じで。

同じように「空」「無我」「寂滅」についても解説しました。

そこへ維摩氏がやってきて、こんなことを言ったのです。

「違う違う！そんな解説の仕方ではダメじゃ！！」

お前さんの解説は、まだ「生滅」というものにとらわれている。

いいか？よく聴きなされ。

あらゆるものごとは、生まれもしないし滅びもしない。それが「無常」の正体じゃ。

人間の様々な精神作用の本質は「空」なのであって、それが起こるということはありません。

それが「苦」の正体じゃ。

ありとあらゆるものごとは、つきつめれば実在しないということになる。それが「空」の正体じゃ。

「無我」と「我」とは、実は全く同じものである。それが「無我」の正体じゃ。

「法」は本来燃えることもなく、消えることもない。それが「寂滅」の正体じゃ。

どうじゃ、おわかりかな？」

その言葉を聴いた受講生たちは、全員たちどころに解脱してしまいました。

つまり私は、オイシイところを全部、維摩氏に持っていかれてしまったわけです。

そういうわけですので、私には無理です。

本当に申しわけありません・・・」

第8話 アニルッダ

「論義第一」の大秀才カッチャーナ（迦旃延尊者）に断られた世尊は、授業中に居眠りしたことを過剰反省して「不眠の行」を敢行し、失明してしまったことと引き換えに世の中の全てのことが見通せる「心眼」を得た超能力者アニルッダ（阿那律尊者）に言いました。

「アニルッダ！頼むよ、ホントに・・・」

アニルッダは、きっぱりと言いました。

「いいえ、私には行けません。

昔私がぶらぶらと散歩していた時のことですが、厳浄という名の古代神の王様（梵王）が、1万人の子分（梵天）を引き連れてやってくるのに出くわしました。

厳浄は私に気づくとやってきてこう尋ねました。

「あなたのその「心眼」は、いったいどれぐらいのものをみるのでしょうか？」

私は得意げに即答しました。

「そりゃもう、この世界の全て（三千大千世界）を、この手のひらに乗せたマンゴーのように楽勝で見ることができますよ。」

その時です。維摩がやってきたのは。

彼は絶妙のタイミングで登場すると、すかさずチャチャを入れてきました。

「はい、質問です。

あなたが今「見ることができる」といったのは、「作られたもの」ですか？それとも「作られないもの」ですか？

もしも「作られたもの」を見ることができる、というのであれば、それは「心眼」なんていう有難いもんじゃない。外道たちが人をたぶらかすために駆使するマジックと同レベルじゃ！

そうではないと言うのであれば、それは「作られないもの」を見ることができるということになるが、「作られないもの」はすなわち「見ることができない」もののハズ。

おかしいじゃないか！何とか言ってみろ、ホレホレ！！」

・・・私が何も言えずにうつむいていると、厳浄は維摩に質問しました。

「それでは世の中で「心眼」を持っている人などいないということなのではないでしょうか？」

維摩は答えました。

「いや、いるとも。それは世の中でたった一人だけじゃ。

あの世尊（ブッダ）だけがそれを持っている。

彼は常にありとあらゆるものを見ておられるが、その見方は、「有る」とか「無い」とかいったレベルを遥かに超越しておられるのじゃ！」

それを聞いた厳浄梵王と子分たちは、「よし、オレ達も頑張るぞ！！」と修行への決意を新たにし、維摩の足にすがりついたと思った次の瞬間には消えうせていたのです。

変幻自在の超能力を持ったインドの古代神である梵天、そんな梵天を1万も従えている梵王である厳浄。

そんな彼らが足元にひれ伏すようなヤツのところへなんて、とてもではありませんが、恐ろしくて行けません・・・」

第9話 ウパーリ

「天眼第一」の超能力者アニルッダ（阿那律尊者）に断られた世尊は、元理髪師（床屋さん）でありながら、大変律儀な性格で皆の尊敬を集めていた「The rule」ことウパーリ（優波離尊者）に言いました。

「ウパーリ！まさか、お前は断らないよな？」

ウパーリは、申し訳なさそうに言いました。

「それが・・・世尊よ、誠に申し上げにくいのですが、ちょっと私にも無理なんです・・・これは他人に言うのは初めてなので、ここだけの話にさせていただきたいのですが、以前、○○とうの2人が私のところにやってきてこう告白したことがあったのです。

「ウパーリさん・・・実は我々2人は、重大なルール違反をしてしまったのです。しかも、そのことを恥じるあまり、誰にも、もちろん先生（ブッダのこと）にも言えずに、ついに今までできてしまいました。

苦しくてこの胸はもう張り裂けそうです。

お願いします。どうか我々をこの苦境から救ってください！！」

で、私はホイきた！とばかりに私が中心となって制定した教団の規則について解説をしました

その時です。維摩さんがやってきたのは。

彼は開口一番、こう言いました。

「バカもん！何をやるとるんじゃ、お前は！！

お前さんが今やったことは、この2人を混乱させて罪を重くすることはあっても、そこから救うことには全くなっていないぞ！！

そんなんなら、やらない方がまだマシじゃ！！

いいか？よく聞きなさい。

例えば、罪に「けがれた」心というものがあつたとしよう。

もしその者が解脱して「清らかな心」になることができたとしたら、その心の「けがれ」はいったいどこへいったことになるのじゃ？

言ってみろ！オラオラオラ！！」

私はなんとか答えをしぼり出しました。

「い、いや、その・・・どこにもいっていません。」

維摩はそれを聞くと、さらに畳み掛けてきました。

「じゃろ？「けがれた心」と「けがれない心」、その2つの質量はまったく同一なのじゃよ。言い方を変えるなら、つまるところ「けがれ」は心の中に生まれもしなかつたし、滅することもなかつたということじゃ。

さらに言うなら、全ての人々の心の「本性」は、無垢だということになるのじゃ。

「罪」とは何か？それは「妄想」を抱くことじゃ。

「罪」とは何か？それは「勘違い野郎」になることじゃ。

独立した「自己」というものが実在する、と考えることは、すなわち「妄想」であり「勘違い」じゃ。

しかし、独立した「自己」というものは実在しない、と考えることも、同じくらい「妄想」であり「勘違い」なのじゃ。

わかるかな？

独立した「自己」というものの有無にとらわれない。

その時初めて解脱となり、罪は消えうせるのじゃ。

そのことをしっかりと理解すること、それを「ルールを守る」と呼ぶのじゃ。

わかったか！！」

それを聞いた2人は言いました。

「おお、なんと素晴らしい！ウパーリなんかまるで「めじゃない」ですね！！」

2人が晴れ晴れとして帰っていくのを見送りながら、私はもうガックリでした・・・

そんな私が、彼の見舞いになんていけるわけがないでしょう！」

第10話 ラーフラ

あろうことか、「持律第一」のマジメ人間ウパーリ（優波離尊者）にまで断られてしまった世尊は、ついに自らの一人息子ラーフラ（羅喉羅）に命令します。

「ラーフラ！お前が行きなさい！！」

ラーフラは言いました。

「父さん・・・いかに偉大なるあなたの頼みとはいえ、そればかりはカンベンしてください。

理由もちゃんとあります。まあ聞いてください。

ある時、ヴァイシャリーの街に住む大金持ちの息子たちがぞろぞろと私のところにやってくると、こんな質問をしたのです。

「ラーフラさん、あなたはあの超カリスマであるブッダの一人息子ですよね？

父上のブッダがそうであったように、あなたもまたそのまま家督を継いだなら、全ての世界を支配する王様（転輪王）になれる資格を持っていたはずですよ。

なのにあなたは父上同様に、それを投げ捨てて出家されました。

いったい「出家すること」には、どんなメリットがあるのでしょうか？」

もちろん私は、嬉々として出家することのメリットについて語りましたとも。

まさにその時です。維摩さんがやってきたのは。

あの人は言いました。

「はい、ストップ！ダメダメ！そんなこと言っちゃダメでしょ！！

だって出家することにメリットなんてないんだから。

もしも「出家すること」が実在するものであるなら、あるいはメリット・デメリットなどということがあっても知れないが、「出家すること」はそんなもんじゃないんじや。

言葉を変えて言うなら、「出家する」という行為は実在しない、ということじゃよ。

「出家した人」はいるかも知れないが、「出家する」という行為そのものをとらえることは、誰にもできないのじゃ。

とらえることのできないものに、色々な事柄がくっつくわけがない。

故に「メリット」とか「デメリット」とかについて語ることはできないのじゃ。

では「出家した人」はどうなるのか？

ひとつ教えて進ぜよう。

「出家した人」には「自我」が無い。

「出家した人」には「自我以外のもの」も無い。

「出家した人」には「自我でもなく自我以外のものでもない」ものも無い。

その境地を「涅槃」と呼ぶ。

ありとあらゆる「概念」を超越することで心の安定を得ている状態のことじゃ。

「あなた」とか「わたし」とかの区別を超え、「善」も「悪」も超越する。

それこそがまさに「出家」ということなのじゃ。

それができたなら「他人に迷惑をかけない」などという消極的なレベルではなく、全ての人々の悩みを救い、あらゆる外道・悪魔を打ち砕くことができるようになるはずじゃ！！

諸君らも是非とも「出家」しなさい！！」

それを聞いた金持ち息子たちは、こう尋ねました。

「いや・・・「出家」は両親の許可無くしてはいけない、とブッダは言っているはずですが？」

維摩さんは言いました。

「そうじゃとも！

しかし「出家」を形式的なものと考えてはいけません。

「悟りを求める心」を起こしたならば、それがそのまま「出家」したということになるのじゃ！！」

それを聞いた金持ちボンボンたちは、大感激して帰って行きました。

・・・全財産をなげうってあなたについていこうとした、私の立場はいったいどうなるのでしょうか。

そもそも維摩さんは出家していません。

社会的地位も財産もそのまま、妻子までいて、会社の経営までやっています。

なのに知識も弁舌も出家した我々を遥かに凌いでいます。
こんなことがあっていいのでしょうか！？
私はあの人の見舞いには行きたくありません！！」

第11話 アーナンダ

一人息子ラーフラ（羅喉羅）にまで断られてしまった世尊は、とうとうアーナンダ（阿難尊者）に命令します。

「アーナンダ！お前なら行ってくれるよな！？」

アーナンダは言いました。

「えーっとですね、これは今まで誰にも話さなかったことなのですが、こんなことがありました。

以前、あなたは体調を崩して寝込んだことがありましたよね？

その時私は、なにか栄養のあるものを食べさせなければいけないと考えて、朝早くから牛乳を探して奔走していました。

あるお金持ちの家に目をつけ、「さぁ牛乳をもらいにいこう」とばかりに門をくぐろうとしたまさにその時、ふいに誰かが私を呼び止めました。

「おいコラ！お前さん、そんなところで何をやっ取るのじゃ？しかもこんなに朝早くから。」
・・・それが維摩さんだったのです。

私は、「世尊さまが病気になったので、牛乳で栄養をつけてもらおうと思うのです。」と答えました。

維摩さんは顔をしかめると、指を口の前に立てて言いました。

「シーッ！このバカモン！めったなことを言うんじゃない！！

あのお方はありとあらゆる災いの元を消し去ることに成功した尊いお方じゃぞ！

そんなお方が病気になんぞ、なるはずがないじゃろう？

お前さんは、その間抜けな口をしっかりと閉じて、すぐに帰ちなされ。

こんな話をもし外道たちに聞かれたらどうするんじゃ！

「え？ブッダが病気だって？ダッセー！！（爆）

あのペテン師め、ついにボロをだしやがったな！！

自分の病気も治せないようなヤツが言うことなんて、誰がまともに聞くかってんだよ！！」

とか悪口を言いふらされることは必至じゃ。

いいか？ブッダはこの世で一番偉い人じゃ。その身体にはチリひとつほどのケガレもないのじゃ。ピッカピカじゃ！！

なんの悩みも病気もないのが、あのお方の仏たる所以なのじゃ。

はいはい、わかったらとっとと帰ちなさい。」

その時の私の情けない気持ちがわかりますか？・・・

私は誰よりも長いこと、世尊であるあなたのお近くについて、誰よりもたくさんあなたの話を聞いてきた人間です。

それなのに、出家もしていないようなジジイに、まるでかなわないなんて・・・

それでもあなたは私に、あくまでも彼のお見舞いに行けと言うのですか？！」

・・・このように、500人の仏弟子たちは、それぞれ維摩との因縁話を持ち出して、全員が「彼のお見舞いには行けません」と断ってしまったのでした。

人間の弟子たち全員に断られたブッダは、それぞれに悟りを得て「人間」の限界を超越することに成功している菩薩たちに話をふりました。

第12話 弥勒菩薩

500人もいる人間の弟子たち全員に断られたブッダは、それぞれに悟りを得て「人間」の限界を超越することに成功している菩薩たちに話をふりました。

最初に声をかけられたのは弥勒菩薩です。

弥勒菩薩（マイトレーヤ）は、ブッダの死後、どうしてもなく墮落してしまうことが確実な人間どもを全員確実に救済する使命が与えられている、菩薩の中のエースです。

現在は「兜卒天」という世界で修行中で、全人類を救済できるだけのパワーが蓄積されるまで、あと56億7千万年かかるということになっています。

（兜卒天における彼の寿命が4000年であることを算出根拠としています。兜卒天での1日は、我々の世界の4000年に相当するため、 $4,000 \times 4,000 \times 360 = 5,760,000,000$ となります）※ちなみに、太陽の質量と核融合反応の速度から求めた「太陽の余命」は、およそ50億年であり、それとの関連が噂されたりもしています。

「弥勒菩薩！お前が行きなさい！」

弥勒菩薩は言いました。

「いやあ、それはちょっとキビシイですね・・・

実はこの間、私が修行している兜卒天まで維摩のオッサンがインネンをつけに来たんですよ。人がせっかくみんなの為にとと思って修行しているのに、こんなことを言うんです。

「こらこらお前さん、お前さんは確か「この世界（天）であと一度だけ輪廻を繰り返せば、究極の悟りパワーをゲットできる」と世尊が予言してくれたとか言っているのじゃよな？」

はい、ここで質問です。

お前さんはその予言を、いったいつ受けたのじゃな？

過去にかな？未来にかな？それとも現在にかな？

もし、「過去だ」というのであれば、その過去はもう滅びてしまっているし、「未来だ」というのであれば、その未来はまだやってきていないので、どちらの場合でも予言を受けることはできないはずじゃ。

それじゃあ「現在だ」と言いたいところじゃろうが、現在なんてものは一刻も留まることなく移り変わってしまうものじゃ。

そんなとらえどころのないタイミングで予言を受けられるはずがない。

おかしいじゃないか！

他にも聞きたいことがある。

「悟りをゲット」できる予定だということじゃが、どこかよそからもってくることができるような「悟り」は存在しない、というのが我らの「お約束」だったはずじゃよな？

「あらゆる事柄は、発生もしないし消滅もしない。真理とは、ただあるがままの姿のことである」というのが我らの教理の基本中の基本じゃ。

それなのにあなたさんは「悟りをゲット」するなどと言う。

いったいどこからどんな「悟り」を、どうやってゲットするつもりなんじゃ？！

そもそも、「万物は全てひとつである」という究極の境地に立ってみれば、「私はあなたであり、あなたは私である」ということになるはずじゃ。

従って、もしお前さんが「悟りをゲット」できるというのであれば、全ての者たちもまた同じことができるということになる。

なにもお前さん一人が「皆の救済者」だということにはならないのじゃないかな？

ホレ、なんとか言ってみろ！オラオラオラ！！」

・・・私も一応菩薩の端くれですので、個人的な恨みとかは持たないようにしようとは思っているのですが、ちょっと私だけで彼のところに行くというのは、どうかご勘弁願います。」

第13話 持世菩薩

菩薩の中のエース弥勒菩薩に断られたブッダは、持世菩薩（ヴァスンダラー）に声をかけました。

持世菩薩は、大地（ヴァス）を保持（ダラー）するというその名の通り、富と豊穰を司るとされた超人です。

「持世菩薩！お前、行きなさい！！」

持世菩薩は言いました。

「いやいやいや・・・それはちょっと出来ない相談です。

まあ、私の話を聞いてください。

ある日のことです。

私はいつものように、キレイに片付けた自室で、心静かにしておりました。

すると何やらにぎやかな音がして参りまして、何事かと思って外をのぞいてみると、帝釈天（古代武神インドラ）さんがギターとドラムとヴォーカルのパートを一人でこなすという超絶技巧を披露しながら通りを流してくるところが目に入りました。

その器用さはそれだけで充分に瞠目すべきものでしたが、なんとビックリなことに、むっちゃイケてる別嬪さんのグルーピーが1万2千人も彼の後ろに付き従って、ノリノリで歌い踊っているではありませんか！

私が最早感心を通り超えて呆れ果てていると、帝釈天は私が見ていることに気がついて、こちらにやってきたのです。

彼は演奏をストップすると、大勢の取り巻きどもとともに私の足元にひれ伏しました。

私は彼に言いました。

「帝釈天さん、あなたがカリスマ的技巧の持ち主で、歌唱力もルックスもこの世に並ぶ者が無いほどの大アイドルであることは私も認めます。でもね、あなた、もうちょっと遠慮して生きた方がいいんじゃない？あんまり調子に乗っていると、破滅するのも早いよ。そんな例はもう過去にたくさんあるんだから。」

・・・いや、決して彼がモテモテなのが羨ましいとか、ひがんでいるとかではないんですよ。もうちょっと生活態度を慎んだ方が、芸能生活を長く楽しめるということを教えたかっただけです。

すると、彼はこんなことを言い出しました。

「はい、あなた様のおっしゃることはいつでも真理にかなっています。そんなつもりはなかったのですが、確かに大勢のグルーピーを連れて練り歩くのはちょっとやり過ぎだったかも知れませんが、今、私は幸いなことにあなた様のご指摘を受けることができました。私は今までの行為を即刻反省することにします。その手始めとして、私はまず、この場限りで、このグルーピー美女たちを手放すことにします。菩薩よ、どうでしょう？この1万2千人の美女たちを全員あなたにさしあげます。身の回りの世話でもなんでも、メイドとしてこき使ってやってはくれませんか？彼女たちには、あなた様に尽くすように私からよく言っておきます。これは私の改心のしるしなのです。どうか快く受け取って下さいますように！」

もちろん私は断りましたよ。

「・・・いや、気持ちは嬉しいんですがね。ちょっとね、戒律がね、色々最近うるさくてね、いやホント、気持ちは嬉しいんですけど、ちょっと受け取り兼ねるっていうか、何と言うか・・・」

私がそう言いかけたその時です。

いつの間にやってきたのか、維摩さんが私のすぐ横に立っていて、こう言ったのです。

「菩薩よ、だまされてはなりません！」

こいつは帝釈天なんかじゃない。

パーピーヤス（波洵）という名のとんでもない悪魔が化けているのです！」

ええええっ！？っと私が驚いていると、維摩さんは続けて言いました。

「おいお前！女たちを手放すと言ったよな？どうだ、ひとつこうしようじゃないか。わしがその女たちをもらい受けよう。わしみたいな人間にこそ、彼女らはふさわしいのじゃないかな？」

それを聞いて、帝釈天に化けた悪魔はのけぞりつつ心の中で思いました。

「うわっ、やべえ・・・ややこしいオッサンが出てきちゃった！！

落ち着け！落ち着くんだ自分！！

維摩のペースに巻き込まれないように気をつけなきゃ！

・・・ダ、ダメだ！もう完全に彼のペースに呑まれちゃってる！

そうだ、バックレよう！それがいい！」

ところがなんということでしょう。

悪魔がその超能力を全て駆使しても、逃げることはおろか、姿を隠すことさえもできないではありませんか！

悪魔が悶えていると、何者かがかれの頭の中に直接話しかけてきました。

「おいおい、お前さんともあろう悪魔が、いったい何をうろたえているんだい？やっちまえよ、女たちなんて。そうすりゃ、少なくともお前だけはバックレられるだろうよ。」

悪魔は「うっ・・・それは確かにそうかも。」と思いましたが、なかなかすぐには思い切れずに、上を向いたり下を向いたりしてひとしきり煩悶した挙句、とうとう女たちを維摩さんに与えることに同意したのでした。

そこで維摩さんは女たちに言いました。

「さあさあ、悪魔はお前たちを私にくれると言ったぞ。

では、私はご主人様として命令する。

お前たちは全員「悟り」を求める心を持ちなさい！」

その他色々の教えを説いて、維摩さんは1万2千人の美女たちの心をその場でガッチリとつかんでしまいました。

彼はさらに言いました。

「はい！皆さんは既に「悟り」を求める気持ちになりましたよね？

「悟り」を求めるのはとっても楽しいことです。

その楽しさは全てのことに勝ります。

だから、今後は二度と、五感（見たり聞いたり食べたりetc.）の楽しみを求めないように！」

女たちは言いました。

「ええっ！？五感以外の楽しみですって？・・・もう少し詳しく教えていただけませんかでしょうか？」

維摩さんは答えました。

「うむ。それは例えばこういうことじゃ。

仏を信じることを楽しみ、その教えを聴くことを楽しみ、衆生を供養することを楽しみ、五感の欲望から離れることを楽しみ、「個々人の内面」などというものはゴーストタウンのようなものだと思うことを楽しみ・・・と、まあ、言い出したらきりがないが、要するに善いものに近づき、悪いものから遠ざかることを楽しむようにしろ、ということじゃ。」

女たちが彼の言葉に真剣に聴き入っているのを見て、悪魔の心は大きく揺らぎました。

そしてついに堪えかねて悪魔は女たちに懇願しました。

「お、おい、お前たち！まさかこんなジジイの言うことを真に受けるわけではあるまいな？頼むからもうこんなところはオサラバして、私と一緒に天空の城に帰ろう！さっきお前たちをこのジジイに与えるなどと言ったのは、あれは、きっと彼の術にはまったからなのだ。私はお前たちを手放したくない！お前たちがいなければ、私はどんな超能力を持っていたところで、ちっとも楽しくないのだ！お願いだ！私と一緒に帰ってくれ！！」

女たちは困惑した表情で言いました。

「・・・でも、私たちは既に、このご老人をご主人様と呼んでしまいました。それに、新しいご主人様の言うとおりに、私たちは最早、五感の楽しみだけでは物足りないのです。」

悪魔はなりふり構わず維摩さんにくっかかりました。

「おい、オッサン！今すぐに、この女どもを捨てるんだ！！

全てのを捨てて人に与える者、それが「菩薩」ってやつだろう？！」

維摩さんは悪魔の見苦しい態度にも関わらず、超然として言いました。

「うむ、そうだとお前。お前の言う通りじゃ。実は私は既に彼女たちを捨てている。どうぞ全員連れて帰るがいい。」

ビックリしたのは女たちです。

「ええええっ！？私たちを捨てた？！・・・ていうか、何で私たち、今さら悪魔の城に戻らなければいけないの??？」

維摩さんは言いました。

「うむ、皆、よく聞きなさい。」

私が先ほどお前たちに伝えたもの、あれは「無尽灯」という奥儀なのじゃ。
たったひとつの、ほんの小さな灯火でも、それを使えば百、千の灯をともすことができる。
いずれ灯は満ち溢れ、遂には全ての暗闇を打ち消す時がくるが、それでもその灯はなくなることはないのじゃ。
おわかりかな？
ただ一人でよいのじゃ。
たった一人でもよいから、ほんのわずかでも「悟り」を目指す心を持つことができたなら、それはこの先無限に増えることはあっても、決して無くなることはないのじゃ。
これをワシは「無尽灯」と名づける。
お前たちはこれから悪魔の城に帰る。
それでも、一度でもこの「無尽灯」の奥儀に触れたからには、最早お前たちは以前のお前たちではないのじゃ。
戻った先々で、無数の天人天女たちに、正しい「悟り」を目指す心の灯火をともしてゆくように！
よいな？・・・」
それを聞いた1万2千人の美女たちは、一斉に維摩さんにひれ伏しました。
見るとあの悪魔パーピーヤスが、維摩さんの足にすがり付いて涙を流しているではありませんか！
次の瞬間には、悪魔も天女も全て一瞬で消えうせたわけなのですが・・・
あのパーピーヤス（波洵）という悪魔は、菩薩たちの持つ神通力を全て備えている上に、仏教の知識もあるという極めてタチの悪いヤツなのです。
そもそも世尊よ、あなたが究極の悟りを得ようとした時に最後まで邪魔をしたのも、またの名を「第六天魔王」と呼ばれるこの悪魔だったんじゃないですか？
私なんか菩薩なのに、一発でだまされちまいましたよ・・・
そんな恐ろしい悪魔が泣いて赦しを請う。
そんな男のところになんて、とてもではないですが、一人で行く気はしませんね。」

第14話 文殊菩薩、出動する

並み居る超人、菩薩たちにも断られたブッダは、最後の切り札である文殊菩薩に声をかけました。

文殊菩薩は、知能の高さだけならブッダすらも超えているという噂のエリート超人です。

ブッダが生まれる以前に存在した7つの宇宙で、それぞれの世界の「仏」の師匠を勤めた実績を持つ大実力者でもあります。

「文殊菩薩！・・・もうお前しかいない！！」

文殊菩薩は困惑した表情を浮かべると言いました。

「うーん、維摩ですか・・・
弱りましたねえ・・・私もあの人は苦手です。
とても立派な人なのですが、なんともやりにくいんですよ・・・
世俗に良く通じていながら、哲学的な真理を完全に理解しています。
弁舌の巧みさは申し分なく、行動の臨機応変なことといったらまさに千変万化です。
我々菩薩たちの持つ超能力の秘訣を既にマスターしているばかりか、様々な仏たちが守っている「奥義の倉」の全てに、もう自分で勝手に入ってしまっているのです。
数々の悪魔たちを降参させ、神々と同じ超能力を駆使する彼の智慧と能力は、もはや完成の域に達しています。
我らが束になってかかったところで、到底かなう相手ではありませんよ・・・
申しわけありませんが、荷が重過ぎます。

・・・とは言うものの、ほかならぬ貴方様の頼みです。
正直なところ全く気乗りしませんが、ここはひとつ、私が維摩の見舞いに行ってみることにしましょうか。」

これを聞いた時、その場に集まっていた8千人の菩薩たち、500人の大弟子たち、帝釈天や梵天、四天王などの古代神たちと天人や人間たち、総勢10万人は一斉にこう思いました。

「おお！あの維摩のところに、あの文殊菩薩が見舞いに行くだって！？
こいつぁ、見ものだ！！」

かくして、文殊菩薩は10万人の観客（野次馬？）を引き連れると、維摩の家へ向かったのです。